

Tech Fun株式会社 御中

生成AI導入支援サービス 無料診断パック 生成AI活用診断レポート

2025/9/5

Tech Fun

Tech Fun 株式会社



目次

1.	診断結果サマリ	P.3
2.	ご相談内容の理解	P.4
3.	技術的実現性の診断詳細	P.7
4.	ビジネス価値・効果の診断詳細	P.13
5.	データ・法令・セキュリティの診断詳細	P.19
6.	運用コスト・導入コストの診断詳細	P.25
7.	人的要因・定着性の診断詳細	P.31
8.	次のステップ	P.37
9.	Appendix	P.42

診断結果サマリ

ご相談内容における 生成AI活用可能性

総合スコア 83 / 100

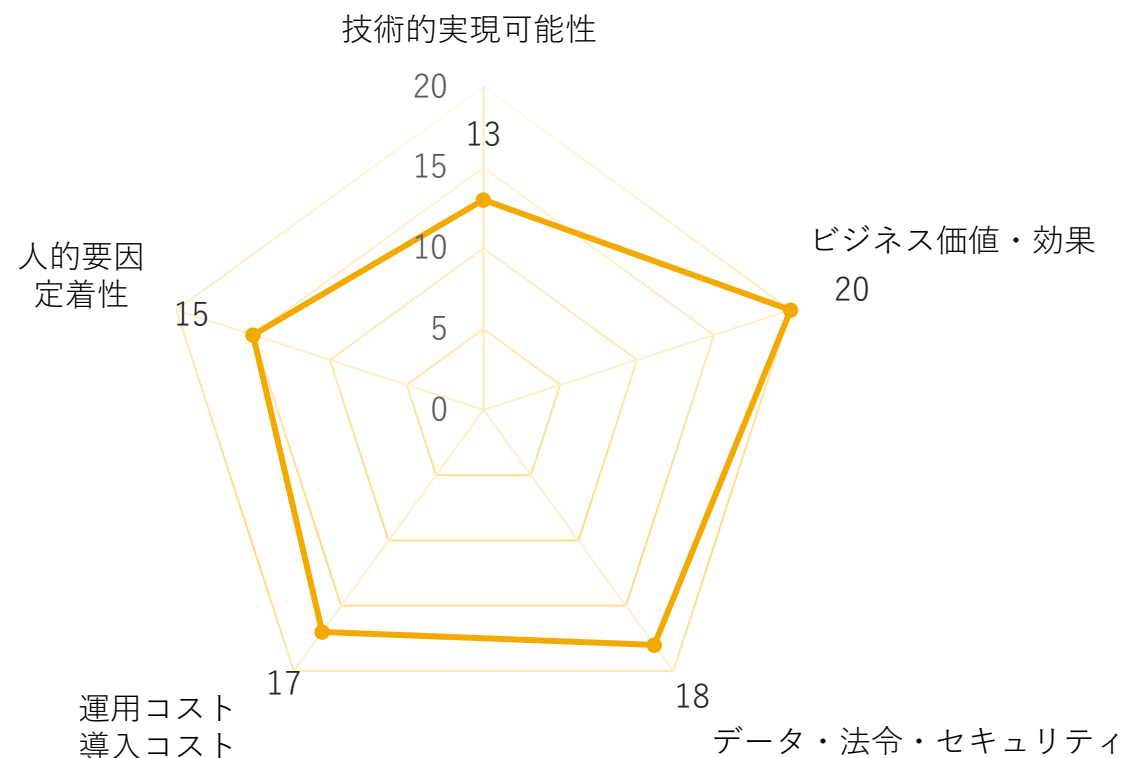
技術的実現可能性 13 / 20

ビジネス価値・効果 20 / 20

データ・法令・セキュリティ 18 / 20

運用コスト・導入コスト 17 / 20

人的要因・定着性 15 / 20



💡 診断結果総評

今回のご相談について、生成AIの導入は「有望」とであると診断しました。

既にGoogleサイト上に整理・構造化された社内ナレッジが蓄積されているため、生成AIによる意図検索で十分な効果が期待できます。ただし、GoogleサイトはAPIを提供していないため、サイトの情報を定期的にシステムへ反映する仕組みを整備する必要があります。また、利用者の質問表現は多様であるため、実際の問い合わせデータを使ったPoCで回答精度を検証することを強く推奨します。総じてPoCの実施価値は高く、初期検証で懸念点を解消できれば本格導入に前向きに進められる見込みです。

ご相談内容の理解

Googleサイトで構築された社内ポータルから目的の情報を意図検索したい

相談背景

Googleサイトで構築された社内ポータルから目的の情報を探すのに時間がかかっており、バックオフィスへの問い合わせ数が多く業務負荷に繋がっている

業務の困り事

検索に時間がかかる！検索しても適切な記事が出てこない！

調べたら分かるような内容の問い合わせが多い！

複数の情報を横断した回答が得られない！

ご要望

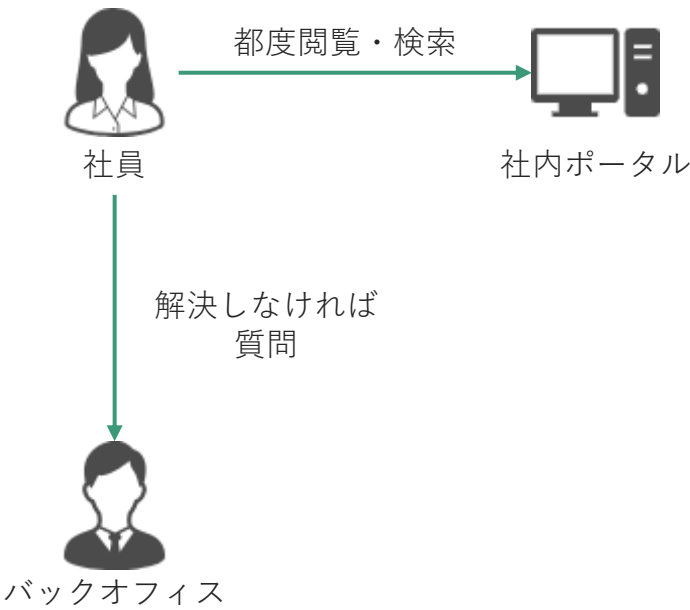
利用者の「意図」に応じた検索を行えるようにしたい

バックオフィスへの問い合わせ数を減らしたい

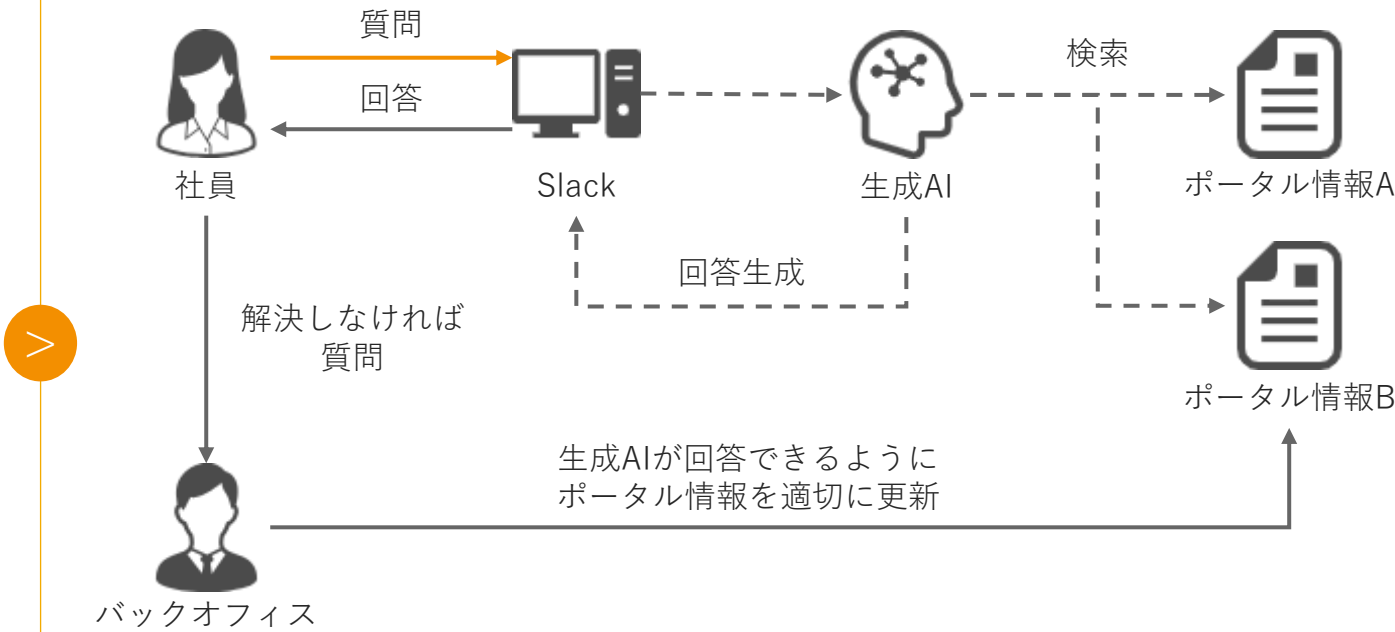
複数の情報から必要なもののみ抜粋して回答を生成してほしい

Slackを有効活用し学習コストを減らすと同時にセキュリティも担保したい

現状の業務イメージ



理想の業務イメージ

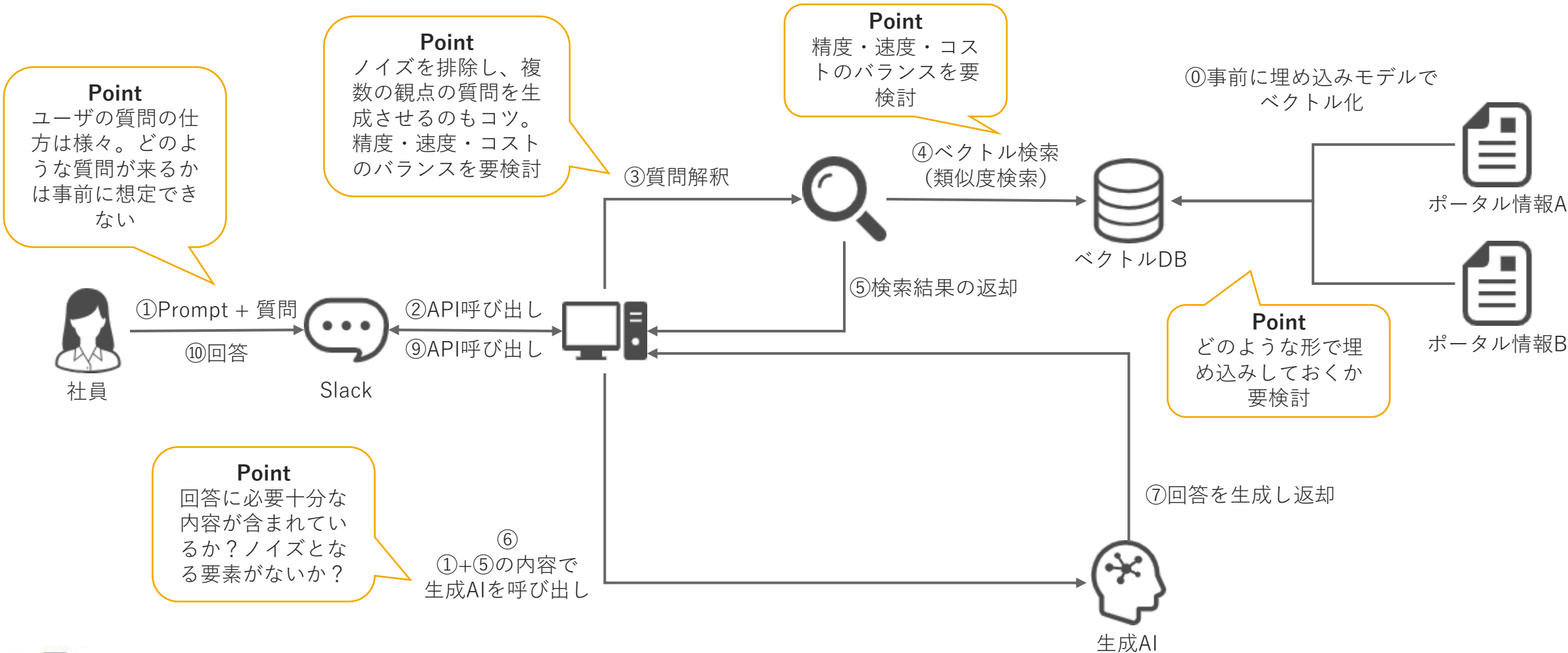


技術的実現性の診断詳細

その業務に必要なモデル・インフラ・システム統合が現実的に実装できるか

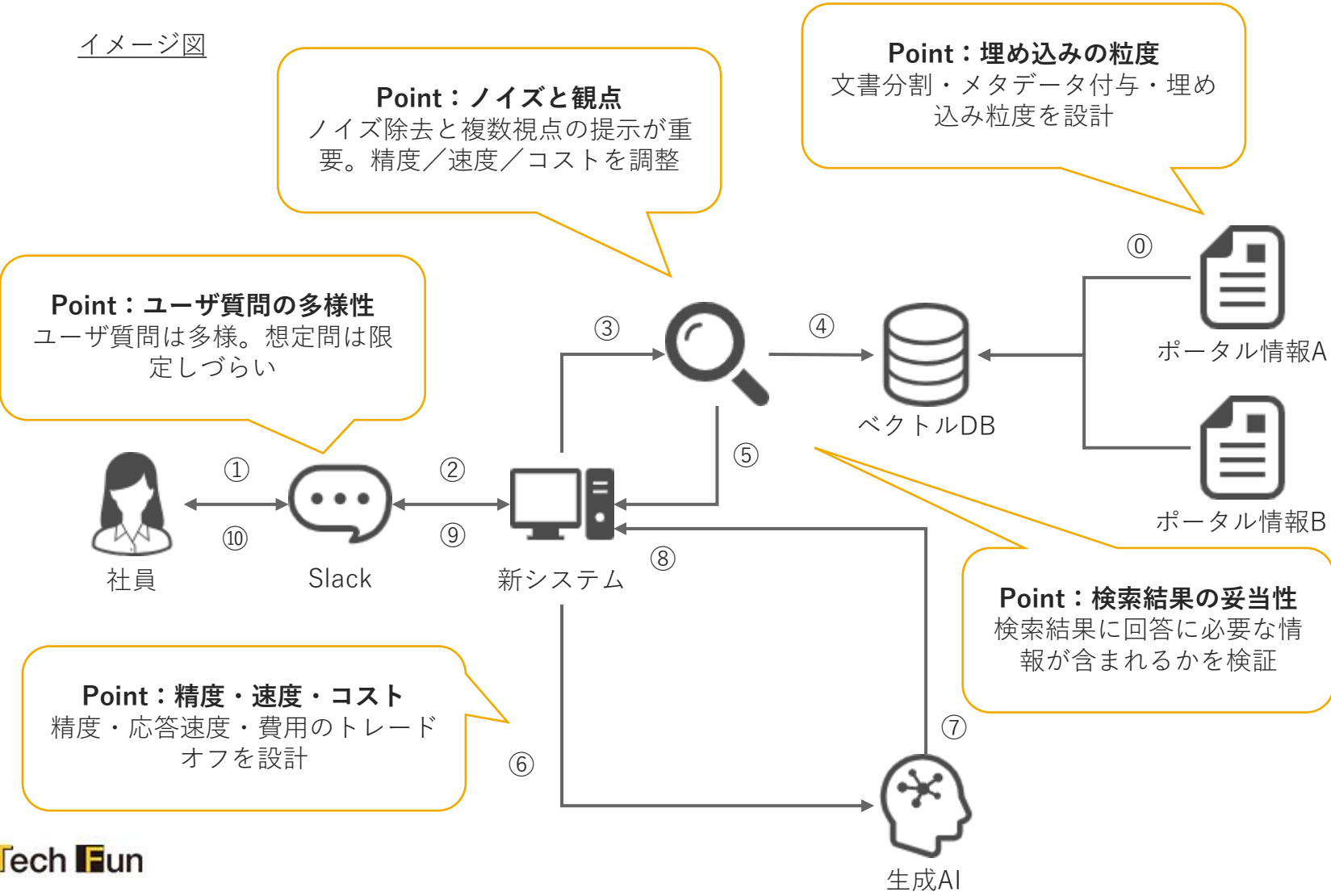
要件適合性	デプロイの難易度	維持・拡張性	技術リスク
4 / 5	4 / 5	3 / 5	2 / 5
【観点】 求められる機能（精度、応答速度、カスタマイズ性）が現行の生成AIで達成可能か 【評価】 生成AIを活用し、RAG技術を用いることで解決可能と診断。精度については要検証。	【観点】 オンプレ/クラウド/エッジ、既存システムとの接続可否、API/SDKの整備状況 【評価】 OpenAI社の生成AIを活用すればAPI経由で呼び出し可能。埋め込みモデルも充実。クラウド環境動作で問題なし。	【観点】 モデル更新、モニタリング、ログ収集、再学習の仕組み 【評価】 再学習は不要。ただし、GoogleサイトにAPIが存在しないため、その仕組みは考える必要あり。	【観点】 ベンダーロックイン、サービス依存度、将来の互換性リスク 【評価】 ベンダーロックインやサービス依存は特にない見込み。他の生成AIモデルも使用可能。ハルシネーションがどこまで発生するか、なるべく緩和する方法は探る必要あり。GoogleサイトはAPIを提供していないため、その仕組みは要検討。

RAG（検索拡張生成）を活用することで要件を満たせると考えられる



RAG（検索拡張生成）を活用することで要件を満たせると考えられる

イメージ図



フロー解説

- ① ポータル情報を事前にベクトル化
- ② ユーザがSlackで質問
- ③ 質問を解析サーバへ送信
- ④ クエリ正規化／意図抽出
- ⑤ 類似文書検索
- ⑥ RAG： Contextを組み込み生成AI呼び出し
- ⑦ 生成モデルで最終回答作成
- ⑧ 応答ログ／精度指標を保存
- ⑨ 回答をSlackへ送信
- ⑩ ユーザに表示

※参照元の出力を必須にすること
※ユーザ評価／人手レビューで品質測定すること

XXX

XXX

XXX

ビジネス価値・効果の診断詳細

導入による定量的/定性的な効果（時間削減、売上、顧客満足、差別化）が十分か

期待効果の大きさ	測定可能性	戦略的適合性	リスク対効果比
5 / 5	5 / 5	5 / 5	5 / 5
【観点】 時間/コスト削減見込み、収益インパクト、CX改善の見込み 【評価】 大幅な検索時間、問い合わせに対する時間の削減が可能	【観点】 KPIを設定でき、導入後に効果測定が可能か 【評価】 問い合わせ数の減少および疑問が生じてから解決までの時間を測定することで、効果測定が可能	【観点】 会社の中長期戦略や顧客提供価値と合致するか 【評価】 AIを推進する戦略があり、またデータ活用基盤を作っていくためのきっかけになる	【観点】 失敗してもリスクが限定的か、逆に失敗時の損失が大きくないか 【評価】 社内利用に閉じた形であり、リスクは限定的

X X X

X X X

X X X

X X X

データ・法令・セキュリティの診断詳細

必要なデータが存在し品質が良いか、個人情報や法令リスクがないか

データ可用性・品質	機密性リスク	法規制・倫理面	セキュリティ対策
4 / 5	5 / 5	4 / 5	5 / 5
【観点】 学習/評価に必要なデータが十分に揃っているか、ラベル品質はよい か 【評価】 十分なデータが存在しており、ラベル付けも問題なし。ただし、似たようなラベルが混ざっているため、その点のみ懸念	【観点】 PII/機密データを扱うか、取扱ルールと匿名化が可能か 【評価】 個人情報や機密データは取り扱わないため、問題なし	【観点】 業界特有の規制に抵触しないか、説明責任は満たせるか 【評価】 特に規制には抵触しない。誤った回答を生成する可能性があるため、その点懸念	【観点】 アクセス管理、ログ保管、脆弱性対策などの対策を講じなければならないか 【評価】 社内ユースのため、セキュリティ対策は不要

X X X

X X X

X X X

X X X

運用コスト・導入コストの診断詳細

実装+運用にかかる総コスト（初期投資、ランニング、外注費）が許容範囲か

初期導入コスト	ランニングコスト	外注内製バランス	スケール時の増分
5 / 5	4 / 5	5 / 5	3 / 5
【観点】 PoC/本番化にかかる開発費用やインフラ費用の見込みが現実的か 【評価】 ベースラインの構築だけであればほぼ初期導入コストはかからず、短期間での導入が可能	【観点】 API使用量、インフラ費用、保守人件費の見込みが現実的か 【評価】 利用者にどこまで使用されるか次第で変わってくるが、高いモデルを使用する想定ではないため問題ない見込み。内製開発のため保守人件費も問題なし	【観点】 外注依存度とそれによる継続コスト、内製化可能性はあるのか 【評価】 内製開発のため問題なし	【観点】 利用拡大時に費用が線形で済むか、急増するか 【評価】 現在の情報量程度であれば問題ないが、社内ポータルが充実し、埋め込み対象が非常に多くなってきたときはある程度のコストが発生する可能性あり

X X X

X X X

X X X

X X X

人的要因・定着性の診断詳細

社員が使いこなせるか、教育コスト・運用ガバナンスが整備できるか

利用者の受容度	教育コスト	運用ガバナンス	継続改善の仕組み
2 / 5	4 / 5	4 / 5	5 / 5
【観点】 現場が期待しているか、抵抗はどの程度か 【評価】 ヒアリング内容だけでは不明。どこまで使用されるかは要検証	【観点】 研修やオペレーションの習熟にかかる工数が見積もれているか 【評価】 Slackから利用可能であり、教育コストはほぼゼロで実現可能	【観点】 利用ルール、承認フロー、品質チェック体制の有無 【評価】 大きな問題は生じないと考えられるが、ハルシネーションによって余計な運用の混乱が生じる可能性あり	【観点】 フィードバックループ（現場からの改善要望の取り込み）があるか 【評価】 内製開発体制があるため、問題なし

X X X

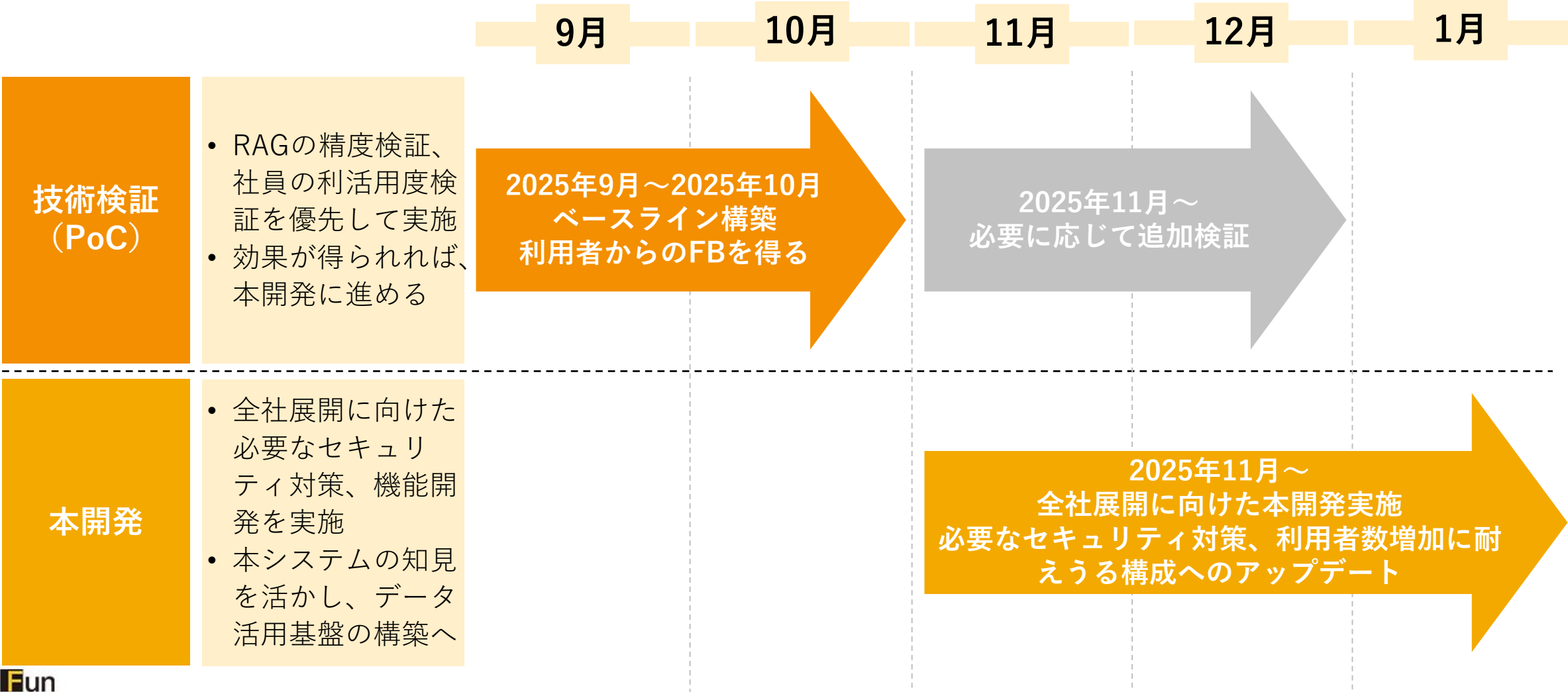
X X X

X X X

X X X

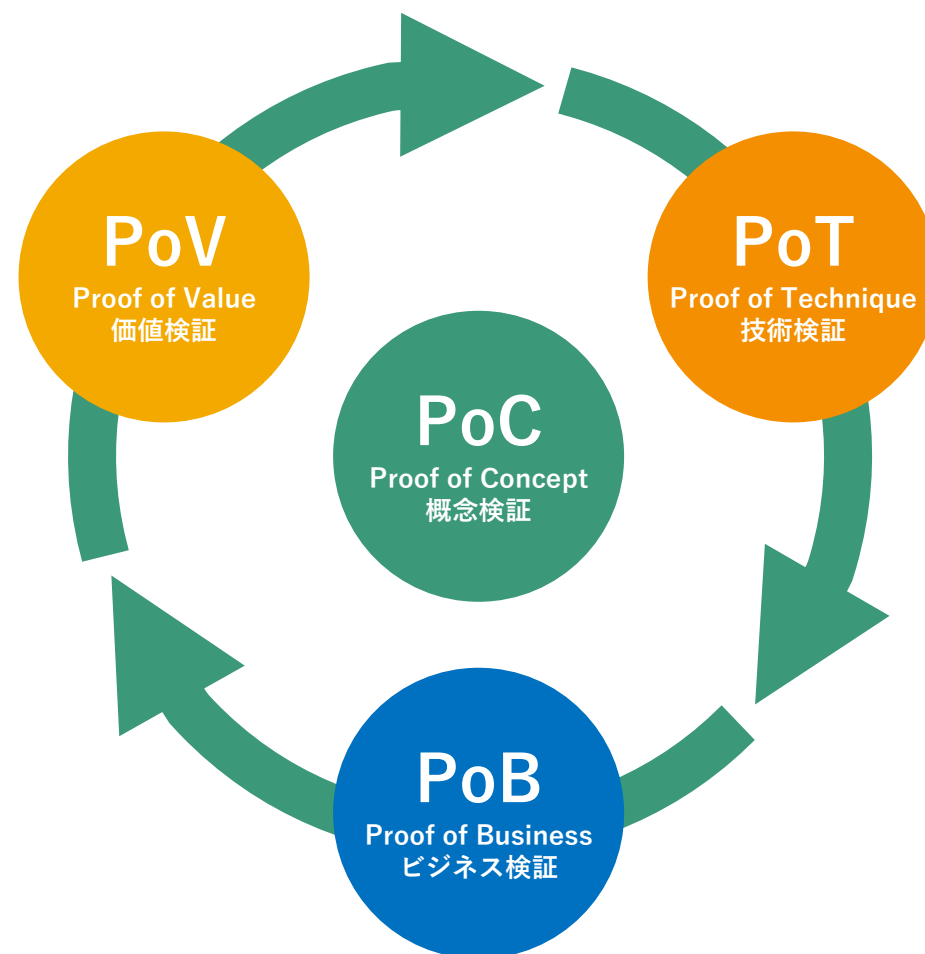
次のステップ

社内のデータ活用基盤の構築に繋げていく



技術検証は3つの観点で、実際に動くアプリを起点に検証を行います

そのシステムを使用することで、期待する価値を本当に生むことができるのか？実際に動くアプリを使用してもらい、顧客やユーザー視点で価値があるかどうかを検証します。



想定している技術、システム構成で、本当に価値を生み出すことが可能か？テクノロジー視点で実現性を検証し、本開発に進む上で乗り越えるべき技術の課題を洗い出します。

開発した生成AIソリューションが、果たして実際のビジネスにおいて成立するのか？経営上の成功に結び付けられるかどうかを検証します。

技術検証時には下記の内容を重点的にチェックすることを推奨します

Proof of Value

- ・利用者は本当にSlackから問い合わせを行うのか？期待する利用頻度・利用回数になるか？
- ・バックオフィスへの問い合わせ数削減は本当に実現できるのか？

Proof of Technique

- ・ハルシネーションの頻度はどれくらいか？現構成で本当に質問に対する回答を満足のいくレベルで行うことができるのか？
- ・Googleサイトの更新をどのタイミングでどのように反映するのか？埋め込みのタイミングは？
- ・複数ページをどのように参照させるか？全文参照はコスト高に繋がる中で、コストを下げつつ精度をどのように高めていくか？

Proof of Business

- ・本システムが生み出す効果と投資額は本当に見合うのか？
- ・ランニングコストは許容できる範囲か？
- ・Slack APIやモデルのアップデートやに伴う改修コストも十分考慮されているか？

 検証失くして本開発は、生成AI活用システムの構築におけるアンチパターン

本格導入前に実際の効果を検証し、投資リスクを最小化します

{使いまわしが可能な形で紹介内容を書く}

Appendix



診断結果について

本診断内容は情報共有のみを目的としております。

{何か書く。プレスまでに検討}

Tech Fun